

青森県立高等学校教育改革推進計画に関する地区意見交換会
(下北地区) (第2回) 概要

日時：平成28年11月15日(火)

13:30～15:30

場所：むつグランドホテル 別館1階 別館ホール

<出席者>

委員

遠島 進 委員、奥島 涼子 委員、越膳 泰彦 委員、祐川 俊樹 委員、
二本柳信行 委員、傳法 厚史 委員、大見 竜人 委員、佐藤 俊介 委員、
長内喜美穂 委員、阿部 謙一 委員、相馬 俊二 委員(進行役)

オブザーバー

三戸 延聖 県立田名部高等学校長、福士 広司 県立大湊高等学校長、
安達 健夫 県立大間高等学校長、 蝦名 博 県立むつ工業高等学校長、
川口 晃世 県立むつ養護学校長

その他(意見聴取のため、出席を求めた者)

柏谷 弘陽 横浜町教育委員会教育長

1 開会

2 教育次長挨拶

三上教育次長から、挨拶があった。

3 事務局説明

(1) 第1回地区意見交換会及び意見等記入票における主な意見

(2) 第1回地区意見交換会において要望等があった県立高等学校のデータ及び他県等の参考事例

事務局から、資料1及び資料2について説明した。

委員から、次のような意見があった。

- 重点校の候補校である田名部高校と地域校の候補校である大間高校の学校規模を維持する場合、下北地区では平成39年度までに大湊高校、川内校舎、むつ工業高校の3校で4学級の減が必要となる。川内校舎については存続を願っているが、その場合、大湊高校とむつ工業高校で学級減が必要となる。

このことを踏まえ、平成39年度までの4学級の減に対し、対応としては3つの案が考えられる。

1つ目として、それぞれの学校を学級減し、小規模校として維持すること。

2つ目として、大湊高校又はむつ工業高校のどちらか1校で4学級を減ずること。

3つ目として、異なる学科を有する統合校を新設し、学級減に対応しつつ学校規模を維持すること。3つ目については、新しい校舎を設置する場合とそれぞれの校舎を活用する場合があると思う。

新しい校舎を設置する場合、校舎が使用できる状態になるまで時間を要することが想定される。仮に、3学級規模の本校と3学級規模の分校を配置する場合、3学級規模の分校に教頭と養護教諭が配置されるのか伺いたい。

→（事務局）3学級規模の分校には、標準法により算定した場合、教頭・養護教諭は配置されないこととなる。

（3）第1回地区意見交換会での意見等を踏まえた学校配置シミュレーション

事務局から、資料3について説明した。

委員から、次のような意見があった。

○ むつ工業高校は、資料3の（下北意見1）と（下北意見2）の両方で存続することになっているが、連携校として存続した場合と拠点校として存続した場合の違いを説明してほしい。

→（事務局）拠点校の役割としては、各分野の専門学科を幅広く設置して学習を深め、県全体の専門学科を牽引することが挙げられる。工業科の拠点校であれば、機械、電気、電子、土木、建築に関する学科を全て設置し、県の工業科を牽引していくこととなる。

拠点校については、基幹となる全ての学科を設置する必要があるため、学校規模の標準を一つの専門学科で1学年当たり4学級以上としているところである。

連携校の役割としては、全ての学科を設置することが難しい中で、それぞれの地域に必要な学科を配置することにより、地域の産業教育を担う人財を育成する学校というイメージになる。

○ むつ工業高校を拠点校として配置した場合、下北地区内のことだけを考えると、むつ工業高校以外に工業科を有する学科がないため、むつ工業高校が拠点校としての役割を果たすことは難しいと思った。

一方で、ある高校が拠点校として配置された場合は、教員配置や予算措置で優遇されることはあるのか。

→（事務局）拠点校の役割としては、例えば、連携校の生徒が当該高校では対応できない資格取得を希望する際に協力すること、連携校の教員の専門性を高める研修会の拠点となることなどを考えている。

どのような支援をすることが連携校にとって望ましいのか御意見をいただきたいと考えている。

4 意見交換

委員から、次のような意見があった。

《下北意見1》

- 資料3の学校配置シミュレーションを見て驚いている。平成39年度までに大湊高校とむつ工業高校で合わせて4学級の減となった場合、田名部高校以外は全て小規模校となってしまう。そのような状況で、子どもたちが夢や希望を持って高校生活を過ごすことができるのかどうか考えていた。（下北意見1）を見ると、全ての学校を維持することは難しいと思っている。

意見等記入票により、川内校舎をできるだけ存続してほしいと意見を述べたが、生徒数の減少を踏まえると難しいと感じた。

- 資料3のどちらの意見を採用するにしても、思い切った決断が必要になると考えているが、学校がなくなるのは悲しい話だと思う。

進行役から、横浜町教育委員会教育長に、下北地区の学校配置に関して求めることは何か意見を求めた。

- 基本的には現状維持の学校配置をお願いしたいと考えている。生徒数の減少が分かっている中、学校の小規模化が進むことは仕方ないことだと思う。

- 現状の学校配置を維持することが一番良いと思うが、生徒数の大幅な減少への対応ということを考えると、現状の学校配置を維持することは難しいと感じた。むつ工業高校を拠点校とした場合、大湊高校と川内校舎の学級減が非常に厳しくなってしまう。その場合、大湊高校における総合学科の役割が維持できるかどうか危惧している。

一方で、むつ工業高校を拠点校としない場合、同校の位置付けも心配である。個人的な意見になるが、むつ工業高校は県の工業教育を牽引する拠点校となしてほしい。大湊高校が就職にも大学進学にも対応できる学校ということも理解しているが、田名部高校が重点校、むつ工業高校が拠点校となしてほしい。

- 北通り地区は、どうしても通学環境がネックになってくると思っている。大間高校は普通科しかないため、北通り地区からの通学環境を良くすることを考えてほしい。

また、学校配置については、全ての学校を残すことを考えていきたい。

《下北意見2》

- 仮に、大湊高校とむつ工業高校を統合した場合、生徒は所属している学科以外

の授業を選択することは可能なのか。

→（事務局）資料2で他県の統合事例を紹介しているが、全国的には、工業科と普通科を統合した学校や、総合学科と専門学科を統合した学校の事例がある。

本県の事例としては、弘前実業高校が商業科、農業科、家庭科、スポーツ科学科を有しており、他学科の授業を受けることができる総合選択制として機能している。

○ 仮に、大湊高校とむつ工業高校を統合すれば、今回のシミュレーションのような過度な小規模化にはならないのではないかと思う。

○ むつ工業高校には設備・エネルギー科があり、地元の産業に直結した学科があるという観点から、むつ工業高校を拠点校とするべきと考えている。

また、今は学級減を前提に議論を進めているが、高校は義務教育ではないので他地区からの生徒を受け入れるなど学級減とならないようにするための議論も必要だと思う。他地区や他県から生徒を受け入れないと学級減になってしまうということを市民に周知してほしい。県教育委員会において、市民レベルで保護者や企業が真剣に議論する機会を設けてほしい。

個人的な意見の結論としては、むつ工業高校を拠点校とし、大湊高校が学級減とならないように議論をしていくべきだと考えている。

→（事務局）学級減の見込みについては、他地区から下北地区に入学してくる生徒や下北地区から他地区に進学する生徒の動向等を踏まえ積算している。現在、県では地方創生の観点により様々な取組を進めているところではあるが、平成39年度に高校に入学する生徒は既に生まれている子どもの人数を基に算定しているところであるため、大幅な増加は難しいと考えている。

ただし、他地区の意見交換会でも、他県から生徒を募集してはどうかという意見も出ているので、そういった御意見なども含め、意見交換を深めていただきたいと考えている。

進行役から、大湊高校が小規模化することの影響について、オブザーバーである大湊高校長に情報提供を求めた。

○ 総合学科は、生徒の進路志望に対応した授業を開設できるという特徴がある。大湊高校の1年生は「産業社会と人間」という職業をテーマにした授業を通して、将来の自分の姿を想像し、自分の将来の進路希望に応じた科目を選択している。

大湊高校の生徒は、2年生から人文科学、自然科学、健康福祉、情報ビジネスの4系列に分かれて授業を選択する。健康福祉系列では介護福祉士を目指し、情報ビジネス系列では商業関係の資格取得に取り組んでいる。特に商業関係の資格取得は、下北地区では大湊高校でしかできないと思う。

大湊高校は、現在1学年5学級規模となっているため、4系列の授業展開が可能となっているが、仮に4学級規模、3学級規模、2学級規模と小規模化した場合は、4系列の授業展開ができなくなる可能性がある。少人数の生徒にも対応で

きるような教員数が確保されていれば良いが、そうでなければ総合学科としての意義もなくなり、生徒の進路志望に対応できなくなることが危惧される。

また、大湊高校には部活動をしながら勉強したいという生徒が入学しており、一生懸命汗を流す生徒が多い。学校が小規模化することによって、部活動を維持することができなくなり、学校の活気がなくなってしまうことは残念なことだと思う。

《その他》

進行役から、横浜町教育委員会教育長に意見を求めた。

- 上北地区の第1回地区意見交換会では、六ヶ所高校において、原子力、風力や太陽光に関する専門家から指導を受けられるような魅力的な学科をつくり、生徒を全国募集しても良いのではないかという意見があった。

私は、町村部において中学校卒業生数を増やすということはかなり難しいと思っているので、視野を広げて全国募集してはどうかと考えている。

また、全国募集するためには、教育の質も上げなければならない。魅力ある学科等も積極的に配置してはどうかと考えている。

それから、田名部高校、大湊高校、むつ工業高校にあるヨットやボートの部活動は県内でも特色があり、全国募集をすれば人が集まるのではないかと思っている。全国募集は、子どもたちや下北地区の将来にとって、色々とプラスになることも多いと思うので、現状がこうだから仕方ないということではなく、地域の方々と共に将来を見据え、色々なことに積極的に取り組んで行くべきと考える。

- (事務局) 資料2の42ページから他県における全国からの生徒募集の事例を紹介している。

資料では、島根県立隠岐島前高校や長野県立白馬高校などの事例を紹介しているが、いずれの高校においても地元自治体が他県から進学する生徒に対し、安心して生活できるようサポートしている。

県立高校の全国募集については、地元の市町村や住民の方々の協力なしには成り立たない。

- (下北意見2) において、平成39年度に大湊高校と川内校舎を合わせて2学級となるが、質の高い高校教育を維持することができるのか危惧している。地域校の候補校となっている大間高校と重点校の候補校の田名部高校では、様々な連携を想定しているという説明があったが、大湊高校と川内校舎が合わせて2学級となった場合、そういった連携はできるのだろうか。

むつ工業高校については、地域のニーズに応えるようなカリキュラムを組むことができるのか。魅力ある学校づくりという観点から、更に学科を充実させてほしいという話にもなると思う。

また、大間高校については、現在の2学級規模の中で漁業コースを設けることはできないものか検討する必要があると考えている。

- 事務局が提示している平成39年度までの学級減の数については、生徒数の減少のみならず下北地区の状況を配慮してくれた結果だと考えている。

全ての学校を残してほしいということが地域の思いだと感じているが、これまで様々な議論をしてきた中でもあったように、小規模校の教育環境の問題もある。特に開設科目数や部活動数が少ないという問題があり、これらは生徒のことを考えると十分な環境ではないと思う。

したがって、地域の実情に配慮し、小規模化してでも存続させなければならない学校がある一方で、できる限り学校規模を縮小しない高校教育改革も必要であると考えている。

また、青森県立高等学校将来構想検討会議の答申に関する地区懇談会では、大湊高校とむつ工業高校の統合を望むという意見もあった。

大湊高校とむつ工業高校を統合する場合、異なる学科を有する学校の統合となる。総合学科と工業科は、下北地区において絶対に必要とされているため、生徒の進路の選択肢の確保という観点から、大湊高校とむつ工業高校の統合を検討していくことが必要だと思っている。

統合する際のメリット・デメリットはたくさんあると思う。そのようなことを検討する中で、下北地区の方向性が決まっていけば良いと思う。

- 現在の下北地区の学校配置は、非常にバランスが取れていると感じている。小学校では、子どもたちの将来の夢に向かって教育活動を行っている。また、今は夢が決まっていなくても、将来、夢や目標を決める時期が来る。

そのような状況の中、中学校を卒業した際に進路の選択肢が狭められてしまうのであれば、生徒の夢が奪われるということになるのではないかと危惧している。

しかし、様々な資料を見ると、中学校卒業生数の減少は避けては通れないということが分かる。それでも意見1のように全ての高校を存続させてほしいとは思いますが、統合という話も含めて、生徒の夢が奪われない形で教育環境を整備してほしいと思う。

- 選抜性の高い大学への進学に対応した学校は不可欠だと考えている。そのことから、6学級規模の学校がない下北地区においても重点校を配置してくれることは、大変有り難く思っている。

また、子どもたちがしっかり資格取得に取り組むことができ、自らが資格を持つことにより将来の道を切り開くことができる専門学科の学校も、重点校と同様に必要だと思っている。

しかし、欲を言えば、むつ工業高校が拠点校でなくても、小学科として特色ある学科を設置し、子どもたちがしっかり先々のことを考え、資格取得できる環境が整備されれば有り難いと思う。高等教育機関がない下北地区のことを考えると、そうした状況を補完し得る後期中等教育の在り方が模索できる環境を残してほしい。

資料3の（下北意見1）と（下北意見2）は、共に良い案だと思うが、第3、第4の案もあると思う。資料3の下北地区の学校配置シミュレーションには、平成34年度までに大湊高校と川内校舎を合わせた学級数が半減するものがあった。平成39年度までに県全体で51学級減ということ踏まえると、下北地区で4学級減ということは仕方がないことであるが、大湊高校と川内校舎を合わせた学級数が半減するということは、激変だと思う。

私が下北地区の中学生だった時は、下北地区の学力の平均は県の平均に及ばなかったが、今は下北地区の生徒が県全体を牽引している。

子どもに学ぶ意欲がないためにその機会が与えられないのであれば、我々は甘んじて受け入れるが、今の下北地区の子どもたちはそういう状況ではないと認識しているので、努力する子どもたちの芽が摘まれることがないように配慮してほしい。

- むつ工業高校を拠点校とすることは良い考えだと思うが、その場合、平成39年度に大湊高校と川内校舎を合わせて2学級となってしまう。

また、仮定の話になるが、川内校舎が募集停止となることはあるのか。

- （事務局）下北地区全体として、平成34年度までに3学級の減、平成39年度までに更に1学級の減ということになっているが、その対象校については、県教育委員会で案を持っているわけではなく、どの学校にも学級減の可能性はある。

- そのことを踏まえると、大湊高校とむつ工業高校の統合を視野に入れて考えていくのが良いと思う。

進行役から、次回の第3回地区意見交換会の開催前に、各委員に対して、これまでの意見交換会における意見等を項目ごとに整理し、当地区の主な意見を整理案として送付するよう指示があった。

その上で整理案について事前に各委員から意見を提出し、第3回地区意見交換会に資することとしたい旨の発言があった。

5 閉会